



Power Platform

導入後の社内定着化にもつながる

検討中の方も必見！

Power Platformの他システムとの連携方法

はじめに

昨今、多くの組織はSaaS（Software as a Service）を導入しており、自社構築であるオンプレミス型サービスを含め、複数のサービスを複合的に活用しています。しかし、それぞれが別々のシステム構造であるため、サービス同士をうまく連携できていないケースも珍しくありません。

そんな中、各組織ではローコード開発ツールの導入が進み、自社に合うツールにするため「カスタマイズされたシステム」が求められています。それを実現するポイントのひとつとして、既存サービスとオンプレミス型システムとの連携が挙げられます。

本記事では、今話題のローコード開発ツール

「Power Platform」と他のサービス・システムとの連携について、ご紹介します。

CONTENS

ローコード開発ツールが導入される背景とは

DX推進とビジネス変化速度の加速がローコード開発ツールの普及を後押し	3
ローコード開発ツールのメリット／デメリット	4
既存ツールと連携することで、ローコード開発プラットフォームは真価を発揮する	5

ローコード開発ツール「Power Platform」と他サービスを連携させる

Power Platformを社内システムのハブにする	7
ローコード開発ツール「Power Platform」と他ツールを連携できるサービス・システムとは	8
業務効率化に大きく影響するオンプレミスシステムとの連携	9
コネクタを活用して、複数のサービス・システムを連携させるには	10

Power Platform導入・運用を成功させるテクバンのサービス

Power Platformの導入から運用まで、ワンストップで支援します	12
アウトソースをご希望の場合：導入／運用保守メニュー	13
内製をご希望の場合：内製化メニュー	14
PoC支援で、貴社に合った開発を実現	15

ローコード開発ツールのメリット／デメリット

メリット／デメリットを知り、上手に使いこなそう

メリット		デメリット	
自社のニーズに合ったツールを導入できる	ローコード開発ツールは、比較的容易に、自社の環境に合ったアプリを作成、導入できます。	開発ツールに制約がある	開発仕様は事業者が定めるため、場合によっては制約されることもあります。
柔軟な開発対応が可能	ある程度の開発環境が揃っているため、開発に関する高い技術がなくても開発作業を行えます。	細かな機能やデザインの実現には、高度な知識が必要	比較的容易な開発は簡単操作で行えますが、細かな条件が定められた機能やデザイン面の変更などは、高度な専門知識が必要となります。
開発期間とコストを削減	開発業務を外注すると数か月はかかるところ、社内で対応できれば開発期間とコストの削減につながります。	ツールを扱う知識が必要	一般的な操作方法に慣れるためには、マニュアルを参考にツールそのものを扱う知識が必要です。
セキュリティ対策の負担を削減	ローコード開発ツールの事業者は、最新のセキュリティ技術を用いて定期的なセキュリティ対策を講じています。		

ローコード開発ツール「Power Platform」と 他ツールを連携できるサービス・システムとは

Power Platformのコネクタ／カスタムコネクタを活用しよう

ローコード開発ツールである「Power Platform」は、他のクラウドサービスやITシステムとの連携を前提にしたサービスです。連携できるサービスは数多く、SaaSから各社が独自で構築しているオンプレミス型システムまで、多岐にわたります。他サービスとの連携方法は、以下の2つの方法があります。

Power Platformに用意されている 「コネクタ」を活用する

コネクタとは、Power Platformが外部サービスと通信できるようにするAPIのプロキシ/ラッパーです。外部サービスとの連携を想定しAPIを用意しているサービスは、コネクタを使用することで、Power Platform上でその機能を活用できるようになります。

カスタムコネクタを作成し活用する

あらかじめ用意されているコネクタが利用できないサービスとの連携が必要なときは、独自のトリガーとアクションを備えたカスタムコネクタを作成することで、連携が可能となります。